狐に化された話

土田耕平

青空文庫

枕もとの障子に笹の葉のかげがうつりました。

「太郎や、お月さまが出ましたよ。」

とおばあさんが云ひました。太郎さんは顔をあげて、おもしろく模様形をした笹の葉のかげを、しばらく見てゐましたが、

「障子をあけて見ようかね、おばあさん。」

「いゝえ、外は寒いからこのまゝがいゝよ。」

秋の夜は早く更けてこほろぎの声がほそ〳〵〳〵とひゞいてゐます。太郎さんとおばあさんは、一つ夜具の中に枕をならべて寝て居るのであります。障子にさす月あかりが、ほんのりと白く二人の顔を浮き出すやうに見せてゐます。やがて太郎さんは、

「おばあさん、何か話をして！」

「まあお待ち、今考へてゐるところだよ。」

とおばあさんは障子の方へ向けてゐた目を太郎さんの顔へ移し、

「今夜はちつと恐い話をして聞かせようぞ。」

「恐い話ならなほおもしろいや。」

「よし〳〵それでは狐に化された話をせう。」

「狐に？　誰が化されたの」

「おばあさんが。」

「おばあさんが化された？　ほんたうなの？」

「ほんたうとも、まあお聞き。」

それからおばあさんは、つぎのやうな話をなさいました。

それは太郎さんが生れるずつと前、おばあさんがまだ若い頃のことであります。

「丁度今夜のやうにお月さまのあかるい晩、お湯のかへり道で化されたのだよ。」とおばあさんは云ひました。

お湯といふのは、太郎さんの村には田圃中から自然に湧き出る湯があつて、それに粗末な小屋掛けをして村の人たちは入りに行くのでありました。農家のことですから昼のうちは野良仕事がいそがしい。お夕飯をすましてからみな呼びかはして入りに行きます。おばあさん達女づれは、大てい夜おそく寝がけに行くことにしてゐました。

その晩は近所の誰彼さそひあはせて五六人づれで出かけました。夜ふけのことでお湯はもうすき〳〵〳〵してゐました。おばあさん達はゆつくりと身体をのばして湯槽にひたりました。湧き出る湯の量が多いから、町の洗湯のやうに垢汚れのしてゐることはありません。こぼ〳〵と湯尻の落ちる音からして、いかにも新らしい匂やかなこゝろもちです。

湯殿の天井には行燈がつるしてありますが、その晩は窓からさしこむ月の光の方があかるい位でした。おばあさん達は世間話などしながら思はず長湯をして、お湯を出た時は大分夜がふけてゐました。空にはお月さまが高く登つてをります。田圃の稲は色よく熟して、夜露にしつとりと濡れて、何ともいへぬ静かな深い秋のながめであります。

お湯から村までは十町ばかりの道のりでした。その間、石ころの多い一本道が田と田の間をまがりくねつて続いてをります。道は幅二三尺しかありませんから、一人が先へ立ち、あとへ〳〵とつづいて行くのでした。おばあさん達は、お湯の中でずゐぶんお饒舌をしたあとなので、皆黙りこんでこつ〳〵歩いて行きました。

と、道の中ほどまで来ました時、ゴウ〳〵とはげしく水の流れる音が行手をさへぎつて聞えました。みな立ちどまりました。こんな所に川はなかつた筈、どうしたのだらうかといぶかしく思ひました。川の音はすぐそこにひゞいてゐますが目には何も見えません。たゞもう真暗闇です。

「道をまちがへたやうですね。提灯を持つて来ればよかつた。」

と一人がやがて口をひらきました。

「でも今夜はお月夜だつたでせう。」

と一人が云ひました。さうです。今し方まで昼のやうにあかるくお月さまが照してゐたのです。みな気味がわるくなりました。お互に手と手をとりあつて、闇の中を見すかしながら、どうしようかと途方にくれてをりました。川の音は、ます〳〵はげしくひゞいてゐます。

「かまはない、歩いて見ませう。」

と誰かが云ひました。みな手をつないだまゝ一足々々と前へ進みました。そして一番先に立つた一人が、川のひゞいてゐる上へ一足踏みおろすと一所に、そのひゞきはぴつたり止んでしまひました。そこには川も何もなくて、闇の中にほんのりと道すぢが見えて来ました。

ヤレよかつた、と思ふまもなく、こんどはゴロ〳〵と雷がなり出しました。たちまち盆をくつがへしたやうな雨がザアツと降つて来ました。丁度道ばたに藁小屋がありましたので、みなその中へ駈けこみました。雷は鳴りひゞく、電はピカリ〳〵とひらめく、大へんな空もやうになりました。今ごろ夕立のする時節ではなし変だと思ひましたが、誰も口に出して云ふ人はありません。女づれのことで、たゞもう恐ろしさにうちふるへてゐました。こんな時むやみと歩かうものなら、溜桶の中へでもはまり込むのが落です。口々にお題目など唱へながら小屋の中で時をすごしてゐました。

やがて、しばらくして、この大降りの雨の中を、傘をさしてスタスタこちらへやつて来る人があります。

「誰か迎へに来てくれたのだ。」

とみな飛びたつやうにして小屋の口へ出て見ました。それは村の権兵衛さんでした。たくさんの傘を抱きかゝへてをりますので、みな、

「ありがたう〳〵。」

と云ひながら権兵衛さんの手から一本づつ傘を受けとりました。

その時おばあさんは、みなのうしろの方にゐましたが、ソツと下駄をぬいで手に持ちました。そして、権兵衛さんから傘を受け取る風をしながら、ふいにその下駄で、権兵衛さんの肩のあたりを力一ぱい打ちました。すると権兵衛さんは、

「キヤン！」

と一声鳴いて姿が消えてしまひました。みんな驚いておばあさんの顔を眺めました。おばあさんは、

「まあ外へ出てごらんなさい。」

と云ひました。

雨はすつかり晴れてお月さまが昼のやうに照りとほしてゐます。そして、ふしぎなことには、あれほど雨が降つた筈なのに道が少しも湿つてをりません。気がついて見ますと、傘だと思つて手に持つてゐたのは短い棒切でした。さてこそ狐の仕業だつたとみな悟りました。

「あなたはどうして権兵衛さんが狐だと気づきましたか。」

と尋ねられて、おばあさんはかう答へました。

「でも権兵衛さんの顔があまりはつきり見えましたから。あの暗闇(くらやみ)の中でね。」

笹(ささ)の葉の影が障子の裾(すそ)の方へ低くなりました。お月さまが高くなつたのです。

「さあ今夜はこれでお眠りよ。」

とおばあさんが云ひました。太郎さんは目をつぶりました。

やがて夜行列車が裏のお山にこだまして通りすぎました。汽車が通るやうになつてから、太郎さんの村では、狐に化された話など全く聞かなくなりました。お湯は今なほ湧(わ)き出てをります。そして昔の板小屋は、今は立派な煉瓦(れんぐわ)づくりに変りました。太郎さんの安らかな寝息を聞きながら、おばあさんはなほ暫(しば)らく障子の月かげをながめてをりました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「蓮の実」古今書院
　　1926（大正15）年10月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2011年10月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐に化された話

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/